

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回も無しです。

解説 (既に存在する言葉について)

1. 詠春刀・・・これは凱歌が使っております詠春拳で使用する刀で種類は”胡蝶刀”で

別名”バタフライ剣”とも言います。

形は鉈型(身幅が広い片刃の刀身)で柄には覆いが付いています。

二本で一式の左右対称の全長50～55cmほどの短刀です。

この刀で戦っている時に蝶が舞うような動きをする事からその名が付いています。

(今回は全長55cmの物とします。)

2. 太極剣・・・これは種類としましては”単剣”に属します。

中国で剣として一般的に”単剣”と呼ばれ、形はシンプルな両刃の先端に向けて細くなる刀身を持っています。

この剣には柄先に”剣穂”と呼ばれる飾り(紐の先にふさふさが付いている物)が付いています。

この”剣穂”の長さで名前が変わります。長い物は”長穂剣”、短い物は”短穂剣”となります。

映画では”グリーンデスティニー”で登場した名剣がこの”単剣”に当たります。

(今回は全長120cmの物とします。)

3. 双剣・・・これは上に書かれております”単剣”を両手に持てば”双剣”になります。

基本的には、中国では剣は一本しか持たないので、両手に持つからといって専用の物というのはありません。

ただ二本の場合でも鞘は一本で、1つの鞘に二本の剣を入れる様です。

(今回は”単剣”を二本持つ格好を取りました。つまりそれぞれが別の鞘に入る格好です。

全長100cmの物を使用します。)

4. トゥーハンド・ソード・・・直訳すると「両手剣」になります。その名の通りこの剣は両手で扱う

両刃長剣です。

全長180cm～250cmの13世紀～16世紀のヨーロッパの剣です。

形は非常にシンプルで柄が両手で扱える様に少し長めになっていて、鍔が刃と十字になる様に伸びている剣です。

あまりの大きさから腰に付けられず、肩から背負う格好を取ったり、馬に括って運ばれてました。

(今回のストーリーの中では全長200 cm の物を使用しています。)

5. 利剣・・・これは不動明王が右手に持っている剣として有名です。

(普賢菩薩も持っていると言われています。)

柄の部分が密教法具の金剛杵(独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵等)になっています。

色は金色で剣先に向けて少しずつ太くなっている感じです。

(今回は全長80 cm 台の物を使用しています。)

6. 鉄扇・・・これは名前の通り鉄板で出来た戦闘用の扇子です。

扇子は鎌倉時代に日本から中国に渡り、そこで武術家の手により武器へと変化しました。

初めは骨が鉄で出来ており、先を尖らせている物もあったそうです。

日本にも鉄板で作られた物がありましたが、開かない鉄の棒としての使い方もされてました。

(今回はやや大きめの戦闘用の展開出来る鉄扇で全長40 cm ほどの物を使用します。)

7. ジャマダハル・・・西洋でカタールとも呼ばれている短剣に属す武器です。

但しそれは間違った名前が伝わった為で実際のカタールは異なります。

インドのイスラム教徒の固有の武器で他の地域では見られない珍しい武器です。

特徴はその形です。形は柄がH型になっておりその先に短い三角の刃が付いているような感じです。

持ち方はHの真ん中の平行な棒を持ちます。つまり上下を棒に挟まれる格好になります。

これは両手に持ち、突き、斬りなど両手を存分に使って戦います。

全長30～70 cm です。

(今回は刃が30 cm ほどの物を使用します。)

8. 釵(さい)・・・これは琉球古武器の一つでもあります。

形は十手にも似た鐔の先端が剣先に向かって長く伸び三叉になっている鉄の棒です。

全長40～50 cm ぐらいです。

両手で持ち、打ち、突き、払い、引っ掛る、投げるなどの様々な攻防に備えた

武器です。この武器が登場する映画では『ハムナプトラ2』でファラオの妃候補の

女性二人がファラオの前で戦う際に初めに使っていた武器です。

(今回は40 cm 台の物を使用します。)

解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. 気功弾・・・気を球体にして打ち出す技。気を凝縮する事で作り出すが、ある程度熟練しないと暴発してします。

2. 円戾弾(えんれいだん)・・・気功弾を気が籠もった手で円盤状にする事でフリスビーの様に

打ち出す技。

かなり熟練していないと形を変えられず、手元で爆発してしまう。

3. 幻炎(げんえん)・・・発動者の気を相手にぶつける事で相手に幻の炎を見える技。

(痛み、熱さも感じさせる)相手が気功の上級者だったり、
気の練りが足りないと効果が薄い、見破られる事がある。

～第73章～<すれ違い>

- きなこの部屋(朝5時) -

きなこは誰かに体を揺すられた。しかし、きなこは昨日の疲れから、なかなか目を覚まさない。
初めの内は優しくあったが徐々に強くなっていた。そして最終的には叩き起こさせる格好になった。
やっと目を覚ましたきなこの目の前には天山が仁王立ちしていた。

「やっと起きましたか……。昨日、言いましたねよ？」明日は朝5時に集合」と。

まゝ2日目で朝5時は辛いでしょうが、時間など明らかに足りないんですから。

それに凱歌とプロフェッサーは4時からだそうですよ。」と少し怒っている感じで天山は言った。

その言葉にきなこは自分の不甲斐無さを痛感した。

「ですが、凱歌もプロフェッサーに叩き起こされていましてからおあいこです。

あっちは単にプロフェッサーが日の出前に起きる人なんで早かっただけです。

本当に歳なんですよ、プロフェッサーは。まゝそれは置いておくとして。

さあ、顔洗って目をしっかりと覚ましてから来て下さいね。

寝ぼけていては出来るものも出来ませんから。」と暢気に天山は言って部屋を出て行きました。

きなこはその変化の早さに驚きつつも慌てて身支度を済ませた。

急いで集合場所の”武道場1”に入ると、柔軟をする天山と起きたばかりといった感じの蒼凱があくび
をしてながら、準備運動をしていた。

すると二人はきなこが入ってきたのに気が付いているのかいないのか、静かに向き合い組み手を
始めた。先ほどまでの眠気がどこかに行ってしまったか真剣な表情の蒼凱が長身を生かした攻撃で
天山を圧倒していた。

しかし天山も体が温まって来たのか攻撃、反応速度が徐々に増していった。

その朝一番の組み手でありながらも素早く通常の体制にする二人をきなこは感心して見ていた。

- 数分後 -

相手の急所に当たる手前で止めた状態に持ち込み、組み手を終わらせた。互いに礼をすると、
笑顔になった。きなこはあまりにも凄い組み手に拍手をしてしまった。

二人は驚いてきなこの居る方を向いた。どうも気がついていなかったらしい。

「きなこさん？ あっおはようございます。もういらしたんですね。

僕らの組み手なんて拍手されるような代物じゃないですよ。準備運動にしかありません。

朝一番で安定していない天山さんより気を使えない僕の方が有利だったんですから。

でも、一番の見物的な組み手を言うなら、やっぱり龍冴さんと天山さんかプロフェッサーと
龍冴さんですよ。

僕はそこらに居る武道家より少し強いだけです。特別な力も無いからです。でも、他の三人は卓越してますから。」と蒼凱はきなこに笑顔で話し掛けながら曇ってしまった眼鏡を拭いていた。

「そんな事ないですよ。蒼凱さんも凄く強いですよ。」ときなこが言うと「凄いね……。」と蒼凱が苦笑いを浮かべた。

「でも、きなこさんの言う事も当たっている。蒼凱は少し謙遜し過ぎです。事実、強いんですから。自分の特徴をよく掴んで上手く利用している。少しは自分を認めたらどうだ？」と天山が言った。

「でも……。周りが凄すぎて認めようがないですよ。その上、僕は妥協したくないんです。人間はいくらでも強くなれると思ってます。常に勉強、鍛錬を怠らない事が人間の可能性を高め、引き出す事に重要だと。だから、これは謙遜ではなく事実です。ま、龍冴さんは別格ですけどね。」といつもの笑顔で蒼凱は答えた。

きなこはその言葉に感動した。そして、自分も常に鍛錬を怠らない様にしようと決意を新たにしました。

「さて、私達の準備運動はこの辺にして。きなこさんにこんなに朝早くに鍛錬を行なうのは、先程蒼凱が私の事でちょっと言っていました"安定していない"と。それは気は心、精神が変化したものという事に関係があります。

寝起きでは力を完全には引き出せません。増してや不安定で危険です。そこで、毎朝素早く気を安定させる鍛錬をします。

そうする事で、寝起き直後は不安定でも短時間で通常の状態に戻せるようになります。更に突然の事にも動じないようになります。ま、心を落ち着ける鍛錬です。

でも、すぐに気の鍛錬に入るのも何なんで、基本的な柔軟や組み手を少ししてからにしましょう。

少し体が温まったら気の鍛錬をちょっとして朝ご飯にしましょう。

腹が減っては戦はできぬです。」と天山は笑顔で簡単に予定を説明した。

それから20分ほど体を温めてから2時間近く、太極拳の構え(よく中国の公園などで見られるものを想像して下さい。)をしながら、鍛錬をした。

- 食堂 -

天山達は食堂に向かった。

流石に朝早いので人の気配はなかったが、誰かがついさっきまで居たらしい。

「あら……。プロフェッサー達と入れ違いになってしまったか……。

それも仕方がないですね。それじゃ、朝食にしましょうか。」と天山は言った。

『なんだ……。ホイさん居ないのか……。』ときなこは少しがっかりしてしまった。

蒼凱がそっときなこに耳打ちした。

「こんな事がっかりしていると、残り3日やって行けませんよ。

凱歌はこの施設の中に居るのですから、今までと比べれば逢える可能性は十分にありますから。」と優しく言った。

「ありがとうございます。」と赤面しながらきなこも小声で言った。

「何話してるんですか？時間は無限じゃないんですから少しも無駄にしない！」と天山はテキパキと朝食の準備をしながら言う。

二人とも慌てて返事をし、準備を終え食べ始めた。

珍しくお互いに話をせずに黙々と食べ終えた。

少し休憩を入れてから再び”武道場1”へ向かった。

僅かな休憩中にきなこはぼーっと天井を見上げていた。

蒼凱はその姿に少し可愛そうな気持ちになってしまった。

『やっぱり凱歌に逢いたいんだな～。先言えなかったけど、これから3日間は恐らく逢うところか見る事も出来ないかも…。二人の鍛錬を行き来する僕が二人の掛け橋になってあげないと。』と蒼凱は一方的な決心を固めていた。

そんな事を蒼凱が考えているとはつゆ知らず、きなこは別の事を考えていた。

『あ～。昨日ビール飲めなかったな～。ビール飲みたい…。ビール飲めたら何でもいいな。』と冷えたビールを思い描きながらきなこは思った。

しかし、その冷えたビールを飲むきなこの隣には優しい笑顔を浮かべる凱歌が居る事も重要なポイントだった。やっぱりきなこは凱歌に逢いたいのである。

- 武道場1 -

きなこは再び太極拳の構えを練習していたが、天山が何かが来るのを待っているような感じで扉を見ている事があるのに気がついた。

きなこは型の練習中にそっと蒼凱に聞いてみた。

「天山さん、一体何を待ってるんですか？」ときなこが小声で訊いた。

「多分、頼んでおいた練習用具が来るのを待っているんだと思うよ。本当は昨日の夜に届けてもらう予定だったからね。」と優しく教えてくれた。

『でも、本当に遅いな…。いつもなら予定より早く届けてくれるのに…。』と心配に思い、蒼凱も扉を見た。

～第74章～ <最強最高の見本>

凱歌達が練習する”武道場2”の扉の前に誰かが足を止めた。

そしてその者は静かに扉を2度ノックした。

プロフェッサーの返事が聞こえたのでその者は静かに扉を開けた。

「お待たせしました。御約束の物お届けに参りました。」と丁寧な言葉遣いで入ってきた者は言った。

凱歌がその声に振り返るとそこには、いつもとは違う感じの白衣の龍冴が左手に大きな包み、背中に長細い包みを背負って居た。

「随分と遅かったのう。お陰でする事を変更せねばならなかったぞ。だから丁寧だったのか？」とプロフェッサーはからかう様に言った。

「久しぶり凱歌！っとそんなに久しぶりでもないか…。」

プロフェッサー、そんなつれない事を言うなよ。確かに約束より一晩遅くはなったがいい物を用意したから許してくれよ。これがその約束の品だ！」と龍冴は言う、プロフェッサーに抱えていた60 cmほどの包みを投げた。

「投げる奴があるか！まゝ、刃は付いていないからいいが…。」と受け取った包みを持ち直しながらプロフェッサーは言った。

「そいつは凱歌、お前の練習用の武器だ。開けてみる。」と龍冴は言った。

凱歌はプロフェッサーから包みを受け取った。その包みは見た目より軽かった。

包みの中にはシンプルでありながら気品と威厳のようなものを秘めた二本の鉈型の剣が鞘付きで入っていた。凱歌がその剣の柄を掴むとまるで吸い付く様にびったりだった。

「そいつは”詠春刀”と呼ばれる双刀だ。

名前の通りこいつはお前が使う詠春拳で使用する為にある刀だ。

プロフェッサーが言ったが、そいつには刃は付いていない。

つまり研いでいない状態の刃が付いている。これなら練習しても怪我はしない。

それと研いだ時と同じ重さ、バランスになる様に調整がされている。

そいつを使って練習すると真剣を使った時も練習と同じ様に使いこなせる。

あと、そいつはお前の体型に合わせてある。それで時間が掛かってしまった。

壊すぐらい練習しろ。武器の重さは命の重さだ。使いこなせないという事は誰も守れない、無用な命を奪う事になる。

武器はいくらでも替えを作る事が出来る。だが、命に替えはない。それを心しておく事。分かったな。

第一、今回は壊してもいい様に三組も余計にあるからな。壊してもすぐに届けられる。

それじゃあまだ届ける物があるから行くぞ。頑張って鍛錬しろよ！」と龍牙が勢い良く出て行こうとした。

「龍牙！一つ頼みがある。」とプロフェッサーが龍牙を呼び止めた。

「何だ、頼みって？」と不思議そうに龍牙が振り返った。

「わしと一戦交えてくれんか？一戦だけでいい。」とプロフェッサーが真剣な表情で言った。

「一戦・・・？一戦だけならいいぞ。こいつを届けないと行けないからな。」と背中の中の包みを指差しながら言った。

龍牙は静かに背負っていた包みを下ろすと、白衣を脱いだ。丁寧に畳んだ白衣の上にその包みを静かに置いた。

少し足を上げたり、首を回すなどの準備運動をしてからプロフェッサーと向き合った。

「一体どんな事をするんだ？単なる組み手ではあるまい。」と龍牙が訊く。

「簡単な事だ。いつもの様に気功の組み手をしてくれればいい。」とプロフェッサーが答える。

「気功か！じゃあちょっと待ってくれ。久しぶりの気功だからな。」と龍牙が言うのと集中し始めた。

その集中する姿に凱歌はコーの攻撃前に動作と似ている事に気が付いた。

しかし、コーとは圧倒的に異なる点があった。それは周囲の空気がビリビリと緊張してきた。

静かに目を開けた龍牙の瞳がギラギラと闘志に燃えていた。

「凱歌、心して見ているんじゃ。お前と同じ”破壊の気”に属す”炎”の気の使い手である龍牙の戦い方を。乱暴でシンプルでありながらも効率よく気を使う様子を。」とプロフェッサーが言った。

その言葉に多少属性等の気について教えられていた凱歌は二人との距離をかなり取った。

「行くぞ。」と龍牙が言うのと勢い良く飛び出した。

その戦闘パターンはかなり乱暴でシンプルな感じだった。

蹴り、拳などのいつもの組み手の様だったが、明らかにいつもよりも乱暴で、何かを放つような感じだった。それが気を放っているものである事は感じ取れた。

プロフェッサーは一方的に押してくる龍牙の攻撃をかわしたら防いでいた。

龍牙が埒が空かないと判断したのか、右手に気を込めた。

凱歌は驚いた。そこには赤々と燃える炎のような物が一瞬見えたからである。

その右手をプロフェッサーに向け振るった。プロフェッサーは慌てて左手で”気壁”を展開した。

龍冴の拳とプロフェッサーの左手の間に隙間が出来ていたが、凱歌にはその隙間に燃え盛る炎とそれを防ぎ盾を見た。

凱歌は息を飲んだ。盾が炎を抑えきれずに砕けようとしていた。

プロフェッサーは素早く作り出した”気壁”を残し、飛び退けた。

その瞬間、気壁は爆音を立て崩壊し、その勢いのまま龍冴が右手をかざした。

それはまるで炎と化した気が龍の様にプロフェッサーに向かっていった。

防御に徹していたプロフェッサーも攻撃に点じた。

右手に溜めていた”気功弾”を両手で押し潰す格好で薄い円盤状にすると投げた。

勢い良く炎の龍を切り裂き、その先に居た龍冴に襲い掛かった。

龍冴は円盤をしゃがんで避けるとプロフェッサーに蹴りを繰り出そうとしたが、先程の円盤がフリスビーの様に戻ってきた。

慌てて身を翻し円盤を避けるとその円盤を左手で捕らえた。

「”円戻弾”か…。お返した！」と怒鳴ると、龍冴の気を込め直し大きくなった”円戻弾”をプロフェッサーに投げ返した。

「この技はわしが教えたものじゃぞ！自分が教えた技でやられるか！」といいと”円戻弾”を叩き消した。

龍冴は『やばっ』という顔するとプロフェッサーに走り込んだ。

「これはオリジナルだぞ！”幻炎”！」とプロフェッサーの目の前で何を爆発させた。

プロフェッサーは突然の炎に動揺したが、すぐにそれが幻影である事を見破ったが、すでに時を遅しだった。

龍冴はプロフェッサーの一瞬の動揺に懐に入り”気功弾”を放つ寸前で止めていた。

「俺の勝ちだ。でも、あんなに早く見破れるとは…。」と龍冴は”気功弾”を消し離れた。

「”幻炎”…。確かに惑わす技としては素晴らしいが、もう少し気を練った方がいいのう。

練りが甘かったお陰で見破れた。これが完璧だったらわしでも見破れなかった。」とプロフェッサーは嬉しそうに言った。

凱歌はその二人の超越した気功戦に見入っていた。

そしてプロフェッサーが言っていた炎の力を思い出していた。

”炎は五つの属性の中でもっとも影響力と破壊力を持っている。

炎の荒々しさは周囲の人間に影響を与え、周囲を興奮させ、冷静さを失わせる事がある。

しかし、その分周囲の者を引っ張る力、団結力を高める。リーダーには持ってこいじゃ。

ただ誰かが炎の暴走を抑える必要がある。炎は全てを消し去る力を持つ。”

プロフェッサーは気付かぬ内に本気で龍冴とやりあっていた。凱歌に見せている事も忘れて…。これが炎の影響。

凱歌は、自分の持つと言われた雷の力が使いになれるか不安だった。

”雷は炎の次に強い破壊の力を持つ。

しかし、炎とは全く異なる性質を持つ。それは周囲に影響を全く与えず、周囲の影響を受けにくい。

一点に強い力を示す。本物の炎は周囲にあるもの全てを破壊するが、本物の雷は落ちた一点にのみ大きなダメージを与える。

そして、これは必要な時に必要な量の力を冷静な判断で下す力。炎の影響に屈しない炎の暴走を抑える力。

”全方向攻撃型の炎”と狙撃と似た”一点集中型の雷”。

同じ破壊の力であっても全く違うお互い。

上手く利用し合う事で最小限の攻撃で戦いを最速で進める事が出来る関わりの深い存在。”

”必要な時に必要な量の力を冷静な判断で下す力”。凱歌は『それは自分にとってまだ未知の力だ』と思った。

そんな事を考えていると白衣を着て包みを背負った龍冴が凱歌の隣にしゃがみ声を掛けてきた。
「この前は訳もなく、変な雰囲気にして部屋を出て行っちゃって済まなかった・・・。
もし相談事がある様ならいつでも言ってくれよ。出来る事は何でもしてやるからさ。」と龍冴は優しく言った。

凱歌は龍冴に兄のような雰囲気を感じ『急に龍冴のような兄が居たら・・・。』と思った。

龍冴は立ち上がり、包みを担ぎ直しながら言った。

「それじゃあ、今度こそ行くからな。

凱歌専用の本物の武器は後日改めて連絡するからそれまで楽しみにしててくれ。

またしばらく会えないと思うが元気でな。

これからきなこさんの所に行くが何か伝言とかあるか？」と龍冴が言う。

「龍冴さん。」と凱歌が声を上げる。「ん？」と龍冴が言うと、「今じゃなくていいんですが、今度聞きたい事があります。」と凱歌が言う。

「分かった。今度会った時に時間を作るよ。きなこさんにはよろしく伝えておくからな。」と龍冴は言う
と部屋を出ていった。

～第75章～ <ライバル>

- 武道場1 -

朝食が終わり、戻って来てから10分ほどが経とうとしていた。

天山のイライラが段々本格的になってきていた。

蒼凱が『これはまずいかも・・・。』と思った時だったノックの音が聞こえた。

そこに入ってきたのは凱歌の所から直行した龍冴だった。

「遅いじゃないか！待ちくたびれましたよ。」と明らかに怒っている口調で天山が言った。

「そう怒るなって。俺だって遊んでいた訳じゃないんだから。

あっきなこさん久しぶりって昨日も会いましたよね・・・。

先まで凱歌の所に居たんです。凱歌がよろしく言っていましたよ。

ああ、これが御約束の品です。確認して下さい。」と龍冴は背負っていた包みを天山に渡した。

その包みは1 m 30 cm はあるかという長細い包みだった。

天山は包みの中をチラッと見てきなこに渡した。

きなこが突然渡されて驚いてると龍冴が口を開いた。

「それはきなこさん、貴方の練習用の武器です。開けて見て下さい。」と言われ、きなこは包みから中身を出した。そこには美しい装飾こそ無いもののシンプルでしなやかな単剣が一本しっかりとした鞘に入っていた。

「それは”太極剣”と呼ばれる単剣で、天山の”リベルト”、”ジュスティス”の原型になっている剣です。

太極拳で使用する一般的な剣です。ただ今回、”剣穂”が付いていませんがね。

抜いたら分かるが、そいつの刃は研がれていない。これなら刃が当てたっても怪我はしない。

しかし、重さ、バランスは研いだ状態と同じになる様に作られている。

これならば真剣を使う時でも苦無く練習同様に使いこなれる。更にこれはきなこさんの体型に合わせて作っています。それで遅くなりました。

凱歌にも言いましたが、壊すまで練習して下さい。武器の重さは命の重さです。

使いこなせないという事は誰も守れない、無用な命を奪う事になります。

武器はいくらでも替えを作事が出来ます。ですが命に替えはないんです。それを心しておく事が重要です。分かりましたね。

第一、今回は壊してもいい様に三本も余計にあるから壊してもすぐに届けられますのご心配なく。」と龍牙が説明した。

きなこは静かに自分用に調整された”太極剣”を引き抜いた。

重さも丁度良く、刀身は研がれていないので切れはしないがきらきらと煌いていた。何より手にフィットし”綺麗”という言葉だった。

「きなこさん専用の本物の武器は後日に改めて連絡しますから、これよりももっと素晴らしい物になっていると思いますよ。」と龍牙が言った。

「ありがとうございます。こんな素晴らしい物を用意して頂けるなんて・・・。」ときなこはお礼を言った。

「素晴らしいなんて・・・。こんなのは寝てても作れるようなちんけなものだよ。さて俺はもう行くがいいか？」と龍牙が言う。

「龍牙、私と一勝負してくれませんか？」と天山が言った。

「えっ！さっきプロフェッサーと真剣勝負した後なのに～。」

俺ってそんなに対戦相手に向いてるのかな・・・。嬉しいような悲しいような・・・。とふふ・・・。
でも、凱歌の前でやった後できなこさんの時にやらないのは不公平だよな～。やるしかないか。」と龍牙は心の中で呟いた。

「一戦だけな。で一体どんなのをするんだ？まさか気功戦じゃないような・・・？」と龍牙が訊く。

「気功戦ではありませんけど・・・。もしかしてプロフェッサーと戦いました？」と天山に言われ、龍牙は頷いた。

「やっぱり・・・。それはいいとして、今回は武器戦をしたいんです。武器はお任せします。

私は”リベルト”、”ジュスティス”は使いません。そうですね・・・。”双剣”を使います。」と天山は言った。

「お前が自分の武器を使わないなら俺も使わない。

それじゃあな～、俺は・・・。」と龍牙は武器庫の中に顔を突っ込みながら言った。

色々な武器を手に取りながら龍牙は真剣に悩んでいた。

実は龍牙と天山は武器戦になると差が無くなってしまうのである。

身体能力で遥かに勝る龍牙だが、卓越した技、剣術を極めている天山はその差を埋めていた。その為、武器の選択次第で龍牙は負けてしまう事がある。

”やるからには勝ちたい”というのが心情である。

しばらくして龍牙は一本の長剣を手にして鞘から抜いた。軽々と左手で素振りをした。

その剣はデザインこそシンプルではあるが、一般的には両手で扱う物の様にきなこは思えた。

「よし！今回は”トゥ・ハンド・ソード”にする。」と言い龍牙は鞘にしまいながら天山の前に立った。

「珍しいですね。いつもなら250 cm ほどの長い物を使うのに。」と天山が訊いた。

「あんなに長いのも何かなと思ってな。

それにあんなに長いのだときなこさんの見本にならないだろう？

折角やるなら見本にならないとな。」と龍牙が”トゥ・ハンド・ソード”を背負いながら答えた。

「それなら心配要らないと思いますよ。

これからやるのは見本である前に真剣勝負であり、きなこさんの見本になるのは私ですから。」と笑顔で天山は言った。

「確かに俺の剣術よりお前の方が正確だからな。でも、やるからには本気だからな。」と龍牙が柄に右手を掛けながら言った。

「分かってます。手を抜くのは相手に失礼です。増してやライバルである貴方には特にね。」と

天山も両手を柄に手を掛けた。

「それじゃあきなこさん、俺達の真剣勝負見届けてくれ。但し距離をしっかりと計る事。

でないといくら研がれていない剣だといっても下手に当たると骨折じゃ済まないかもしれないから。」と龍牙が注意をきなこに言った。

きなこはそれを聞く前、二人が向き合った時から発する殺気にも似た物から危険を感じ取っていた。

龍牙の言葉に素直に従うのが身の為と心し、きなこは頷き間合いを取った。

それを確認すると二人は再度向き合い、礼をした。そして静かに柄に手を掛け間合いを取った。

沈黙が場を支配していた。互いに出方を窺っていた。両者ともライバルというだけあって攻撃パターンを熟知している。

迂闊に出れないのである。そんな時、天山が戦陣を切った。

天山は剣を反対に、つまり刃を後ろ手に持ち両手をクロスさせる様に斬り込んでいった。

龍牙は大剣である為、剣を引き抜くのが天山よりも遅れてしまうが、それをまかなう身体能力があった。

斬り込んできた天山の双剣を縦に飛び避け、両手で鞘から剣を引き抜く反動と共に落下する時の回転の反動を込めた刃を天山の背後に振り下ろした。

しかし天山はそれを予期してこの異常な構えをしていた。クロスした剣を引き戻し、直立の体制になった。

それにより双剣は背後に回り、背中でクロス格好になった。そして刃がぶつかり合う瞬間に刃を返し勢いを殺した。

前転をする格好で龍牙が着地し、素早く間合いを取った。

しかしいくら勢いを殺したとはいえ、あの龍牙が力を込めて更に回転の反動が籠もっていたのである。多少の衝撃が天山の両手に来ていた。僅かな痺れが残った。

天山は内心、それには焦っていた。予想外に衝撃が籠もっていたのである。

しかし、それを表に出さず冷静に事を見定めていた。

次は龍牙が斬り込んで行った。

その動きは大剣を扱っているとは到底思えなかった。まるで短剣を振るっている様に軽々と右手で攻めて行った。

天山は双剣を持ち直しており、その普通では考えられない大剣の敏速な斬り込みを払いながらも攻撃の機逢を窺っていた。

その内、天山も龍牙の攻撃の隙間を縫って斬り込んでいた。

両者共に合いまみれるような格好になり、壮絶な剣と剣のぶつかり合いになった。

そこには剣がぶつかるごとに鋼が弾け、閃光が見えた。

そして、二人はぶつかっては離れ、ぶつかっては離れるような動きに移った。

互いに大振りをせず、細かい手先の繊細な攻撃を一撃、一撃の中に入れてきた。

きなこには一振り一振りのぶつかり合いに見えていたが、実際はぶつかる際に3撃以上のぶつかり合いが行なわれていた。

それは単なる振りではなく、相手の剣を弾き飛ばそうなどの思惑のある繊細な攻撃が繰り返されていった。激しくぶつかり合う二人の剣が悲鳴を上げ始めた。

二人もその悲鳴に気が付いていたが互いに攻撃を弱める事をしなかった。

きなこの耳にも二人の剣から鋼にひびが入って行く不気味な音が入って来た。

互いに刃を交え押し合っているなどをしている中、龍冴が剣を全身全霊を込めて振るった。

天山も龍冴に合わせて全力で双剣を振るった。

三本の剣が両者の力が籠もって交じり合った。その瞬間、三本の剣が大きな音を立てて砕け散った。

二人は冷静に砕け散った剣の柄と鞘を投げ捨て、すばやく自分のそばにある武器庫から武器を手にとった。

天山は”利剣”を手に取り、龍冴に踏み込んでいた。

龍冴は咄嗟にその場にあった”鉄扇”を手にし、”利剣”を防いだ。

二人はそのまま力比べのような格好になった。しばらくぶつかり合ってから互いに飛び退けた。

龍冴は素早くもう一つ”鉄扇”を持ち、広げ構えた。しかし、龍冴の中に焦りが生まれていた。

『何で！よりによってこんな扱いづらい武器を手にしたんだ！』と自分に怒りを感じていた。

天山はしっかりと”利剣”を構え直し、様子を窺っていた。

龍冴は意を決して天山に攻撃を仕掛けた。

剣よりもリーチが短い分、素早く細かい攻撃の出来る”鉄扇”の利点を生かした敏速な攻撃を連続で仕掛けた。

しかし、天山は剣術のプロである。それを考量し剣の持ち方を変え先を読んだ動き、回避を行なった。

だが、龍冴の高速攻撃に反撃する事が出来ずにいた。

反撃こそ出来ないがダメージも受けていないので、両者共に疲労を溜めるだけに終わっていた。

しかし、龍冴のテンポが一瞬乱れた。その瞬間を天山は逃さず、龍冴の右手の”鉄扇”を弾き飛ばした。

龍冴はそれを待っていたかの様に左手の”鉄扇”と共に天山の”利剣”を弾き飛ばした。

これにより両者は再び武器を手放してしまった。

二人は素早く再び武器を手にとろうと離れた。

弾き飛ばされた”利剣”と”鉄扇”がきなこの居る所に落下して来た。

二人の戦いに集中している為に気付かずにいると蒼凱が素早く二つの武器を手にして棍棒で払った。

その両者は床に突き刺さったがその刀身には大きな亀裂が走っていた。

きなこはこの二人の戦いがとんでもない事を再び痛感すると同時に、自分は凄い人達に武術を習っていると喜ぶ自分が居た。

『きなこさん、あの二人の戦いを見る時に注意する事があります。』

二人は戦いを始めると周囲が見えなくなります。ですから、自分の身は自分で守るしかありません。とはいえ今回は僕が居ますから安心して見ていて下さい。そろそろ決着が着きますね。」と蒼凱が静かに言った。

きなこが二人に目を向けると二人は新たな武器を手にして向かい合っていた。

龍牙は”ジャマダハル”を手にした。そして天山は”釵”を手になっていた。
両者共に両手に武器を持っている為、先にも増して凄まじい打ち合いが繰り広げられていた。
一人が突きを繰り出せば相手はそれを片手で払い、片手で斬り込む。相手はそれを防ぐ。
そのようなまるで計算されたような動き。正に美しき舞いの様だった。
「あれは卓越した者同志が戦っている内に自然となってしまうという、そして見ている者を
引き寄せる最強の無の奥義”舞い”」。
僕のような槍使い同志で”舞い”となれば、それは”槍舞い”という奥義となり、様々な武術において
存在します。
でも、大半は何か一つを長年極めた者だけがその極めた先にのみで得る物です。
しかし、龍牙は全ての武術で、相手を”舞い”に持ち込む事が出来る。
それは相手の力を最大に引き出し、引き寄せる技術がある証拠です。
僕はあれを見るといつも龍牙さんの凄さを実感します。
いつも陽気な龍牙さんが”神話”の域まで行く暗殺者である事を忘れてしまう事がありますが、
あれを見ると彼の本当の強さを思い知ります。
そして、これが彼の過酷な経験がさせているものだと思うと自分は幸せ者だと思います。
僕の”舞い”にはどこか軽い感じがある。でも、龍牙さんのは経験からの真の命の駆け引き、
命の輝きを感じる。
だからこそ、より美しく感じ、行なう者は真剣にそして生きている事を実感出来る。」と蒼凱が今までの
楽天安な表情とは違うどこかいくつもの修羅場を越えてきた武道家のような表情をして言った。
その瞳には悲しみが籠もっていたような、そんな気がきこえはした…。

そんな二人が静かに美しき舞い師と化す龍牙と天山を見ていると、両者の動きに変化が起きた。
互いに疲れから隙が出来始め、両者の打ち込みが入り始めた。
二人を声を上げ、全力でぶつかっていた。
そして二人の動きを止まった。龍牙の右の”ジャマダハル”は胸に、天山の右の”釵”は龍牙の首に
当たる寸前で止まっていた。
両者、武器を下ろし礼をした。これにより長い戦いが終わった。
きなこと蒼凱が感心していると、二人はそのまま床に倒れてしまった。そして笑い始めた。
「天山、また腕を上げたな。引き分けというのは悔しいがやっぱりお前は最高の相手だよ。
あの時、”トゥ・ハンド・ソード”が砕けなかったら負けてたかも…」と龍牙が嬉しそうに言う。
「確かにあの時砕けなければ勝てたかもしれませんが、砕ける事も計算に入れていたくせに…。
それより貴方こそまた強くなっていたじゃありませんか。
それに腕を上げるのは当然です。でなければ、貴方と堂々と戦えませんからね。常に鍛錬ですよ。
でも、貴方が強くなると私も嬉しい。同じではつまらない。私と遣り合えるのは他の四天王ぐらいです
からね。特に楽しみなのは貴方ですけどね。」と天山も嬉しそうに言った。
「全く二人とも戦いが終わって楽しそうですけど、これどうするんですか？
こんなに武器をダメにしちゃって…。
本当にお二人は仲間というより互いを高めあうライバルですね。」と蒼凱が二人に近づきながら
言った。
「あっ！そうかこの武器達の代わりを用立てないと…。

でも、武器達は喜んでるよ。こんなに真剣に戦ったんだからさ。」と龍冴は起き上がりながら言った。

きなこは龍冴と天山の楽しそうな姿を見て、『ホイと自分も近い関係かも』と思った。

「さて…。”双剣”が一式、”トゥ・ハンド・ソード”1本を新しく用意して。

”利剣”と”鉄扇”と”ジャマダハル”と”釵”を修理に出さないといけないのか～。

これは大変だな～。」と龍冴は壊れた武器を集め、それを見ながら後ろ頭を掻きながら溜息混じりに言った。

壊れた武器を袋に詰め、持つと龍冴は話を始めた。

「きなこさん、貴方にとって俺達、つまり凱歌も含めてだが一度関係を整理するといい。

俺にとって天山は良きライバル。プロフェッサーは難しいが親にも似た関係。蒼凱は弟みたいな親友かな。そして凱歌ときなこさんは今一番守りたい大切な人。そして全員信頼し命を預けられる事が出来る仲間。

関係はとても重要な事だ。だからといって俺達を命の恩人とか特別扱いしろとかそういうのはして欲しくない。

ただ、俺達は信頼する仲間です何でも相談や打ち明けて欲しいんだ。分かっただけで欲しい。

じゃあ、仕事がまだ沢山有るから行くな。頑張れよ！

あと蒼凱、話があるちょっと来てくれ。」と龍冴は武器の残骸を背負いながら蒼凱を連れて部屋を出た。

「全くカッコイイ事を言おうとして…。でも龍冴の言う通りきなこさん、何でも言ってくださいね。

ここでは互いを信じる事が大切です。同じここに住む者で、命を預け合う事になる者同志ですからね。」と天山が笑顔を見た。

その後、きなこは天山からテンが良く剣の鍛錬を始めたが、一度も龍冴が届けてくれた”太極剣”を抜く事は無かった。

天山は『ろくに剣を持った事が無いのに本物と同じ物を持つのは良くない』と木剣を使っただけの剣の使い方。そして気を力や敏捷性に変換する方法を学んだ。

きなこには天山が凄いと思った。あれだけの戦いの後で指導を続ける体力に驚いた。とはいえやはり天山も人間である。疲れて話を終え戻ってきていた蒼凱と変わっている時もあった。

2日目もそんなこんなで過ぎて行った。

そして、またしても凱歌ときなこは逢う事が出来なかった。互いに何をしているかも知らずに…。

互いに逢いたいという気持ちは積もるばかりだった…。

- 続く